

公益社団法人日本助産師会

ベトナム訪問報告

[課題の発見と今後の計画立案への支援]

ベトナム訪問報告 [課題の発見と今後の計画立案への支援]

1. はじめに

この度、JICA 国際支援プロジェクト「ホップステップ国際協力」助成事業として、岡本喜代子会長と私は、2014年9月14日～9月18日、ベトナム社会主義共和国（以下、ベトナム）中部の古都フエを訪問しました。日本助産師会とベトナム助産師会（VAM）は2011年にICMのTwinning Programmeでできた4組のペアの一つで、これまでもたくさんの交流を行ってきました。フエはこのVAM本部の所在都市で、中部最大の都市ダナンから車で約1時間半のところにある総面積83km²、人口30万人の小都市です。短い期間でしたが、現地助産師とともに活動したくさんの発見がありましたので報告いたします。

2. 今回の訪問で行った活動内容

1日目、ベトナムの母子保健事情を把握するために、ベトナム助産師会メンバー（北部から南部までの主要メンバー）および、フエ地区母子保健行政関係者との詳細なミーティングを行いました。2日目、コミュニケーションヘルスセンター（町の診療所兼健康管理室のような施設）の視察を行いました。3・4日目、地域で暮らす母子に対して助産師が行う家庭訪問に同行し、地域の母子の状況やニーズを確認しました。全日、ミーティングを行い、現在の課題と今後の取り組みについて話し合いました。



フエ地域で最も大きなコミュニケーションヘルスセンター



ベトナム助産師会メンバーとのミーティング



母子家庭訪問

3. 活動を通じて新たに発見された課題

この度の全活動を通し、ベトナムのほとんどの地域では、妊娠中に最低 3 回の妊婦健診および無料の予防接種、産前 1 か月と産後 4 か月（帝王切開、多胎分娩は+1 か月）の有給の産休・育休が国により義務付けられていることがわかりました。妊産婦はそれぞれの居住地域や経済状態に応じた施設で受診し、国内の 95%以上の分娩が医師と助産師のいる施設で行われていました。また、受診回数が十分でない妊婦やハイリスク妊婦には行政から依頼を受けた担当者が受診を促す等の介入をしていることから、妊娠および分娩期の母子保健事情は、「安全」という意味ではおおむね改善されつつあると思われました。

しかし、人口の都市集中化と少子化に伴いベトナムでも分娩の大病院志向が強まり、その結果多くの病院が収容力以上の分娩を抱え、女性のプライバシー保護や満足を重視できない状況となっています。また、産後の入院室不足が起き、入院中の保健指導や産後の支援体制なく産褥 1 日目で母子は退院していきます。富裕層の母子は、私費で助産師の家庭訪問を受けますが、そこで行われているサービスのメインは、沐浴代行です。ベトナムでは、近年全国的に急速な少子化・核家族化が進み、育児への適応や育児技術の習得、母子の心身の異常の早期発見等が母親一人では難しいのが現状です。女性が尊重される快適な分娩とともに、産褥早期をはじめとした産後の支援強化が、今後の重要な課題であると思います。

4. 活動を通して得られた成果

本会と VAM がこれまでに培った信頼とコミュニケーションの円滑さにより、この度、一緒に地域の母子家庭訪問を行い、母子の様子や助産師の活動の様子を見ることができました。また、これまで本会会員は VAM の Phan Thi Hanh 会長の流暢な英越通訳により現地の方々とのコミュニケーションをとってきましたが、今回の訪問では私の知人であるフエ大学日本語学科学科長 Tra 先生と同学科 Cam 先生のご協力（日越通訳）により、地域の母子や家族、現地助産師と直接話をすることができました。さらに地域母子保健行政機関の責任者から、「日本助産師会の協力・指導が得られるならば、制度面、財政面での VAM への協力強化を約束する」というお言葉をいただきました。

5. 新たな課題に対する今後の取り組み

VAM が中心となり、富裕層だけでなく地域の全母子を対象に家庭訪問事業を普及させる（中流層には健康管理に出費する価値を理解して利用してもらい、貧困層には少ない負担または無料で利用できる仕組みをつくる）ことを検討していくことになりました。また、沐浴代行がメインではなく、母子が心身ともに健康に生活でき、母親が育児を楽しむように、助産師が包括的に支援できるような家庭訪問スキルを身に付けられるようトレーニングの実施も検討されることになりました。

6. おわりに

短い日数でしたが、「母子のために共に行動し、発見し、考える」ことができた有意義な訪問でした。今後も、国籍や人種の違いに関わらず、母子の健康と幸せを考えていきたいと思います。